

モールの応力円(直交三軸応力対応)

Otto Mohr の考案による応力円のおさらい。

直交三軸応力 $\sigma_1, \sigma_2, \sigma_3$ が既知のとき任意の向きの平面上の垂直応力 σ 、せん断応力 τ を求める。

直交する2面の σ 、 τ から主応力を求める。

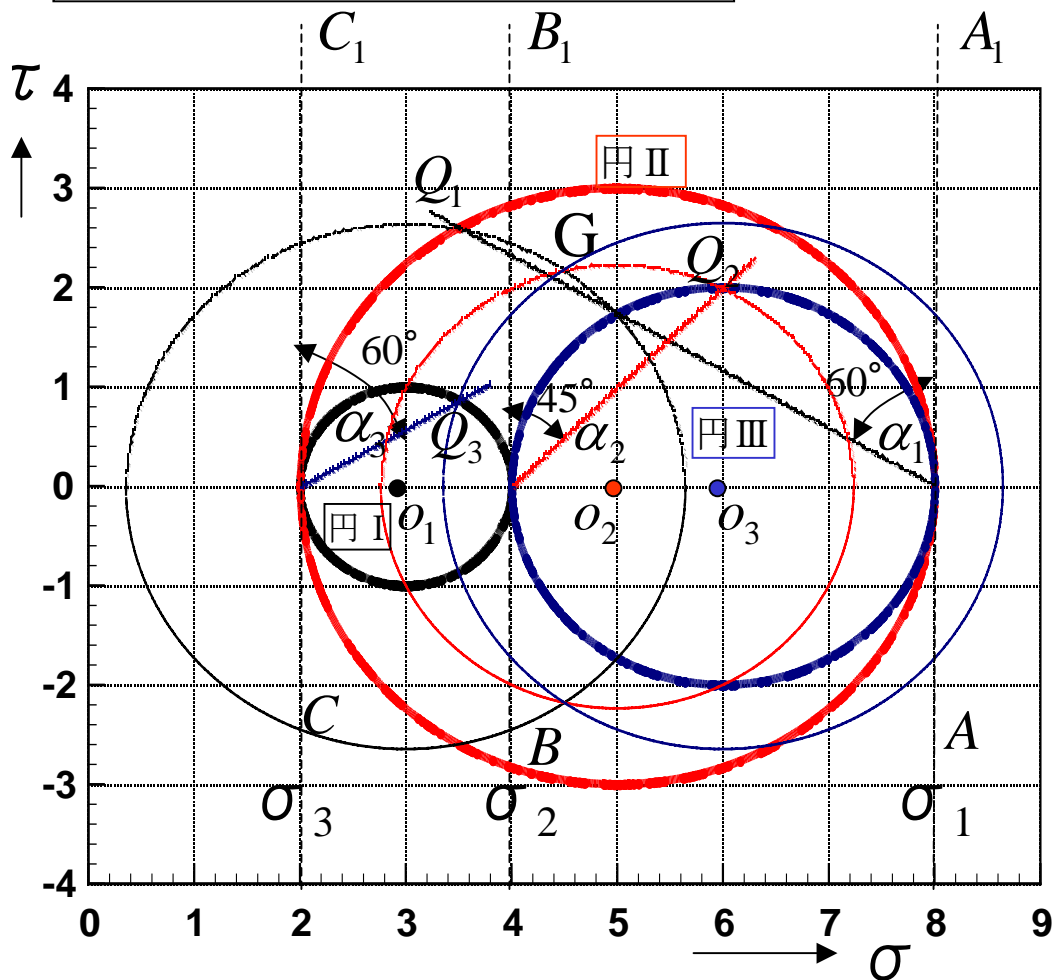
二次元問題での、最大せん断応力、最大、最小垂直応力
最大傾斜角を求める。

参考資料

湯浅亀一「材料力学」日本機械学会1952年

岡本舜三「応用力学演習」理工図書1955年

3次元(直交3軸応力時)の σ 、 τ
3次元用モールの応力円



$$\sigma_1 = 8, \sigma_2 = 4, \sigma_3 = 2$$

$$\alpha_1 = 60^\circ = \frac{\pi}{3}, \alpha_2 = 45^\circ = \frac{\pi}{4}, \alpha_3 = 60^\circ = \frac{\pi}{3}$$

モール(Otto Mohr)の応力円は主応力 $\sigma_1, \sigma_2, \sigma_3$ (or $\sigma_x, \sigma_y, \sigma_z$)が既知であり、ある面の法線が、 x_1, x_2, x_3 (or x, y, z)軸となす角が、 $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3$ (or α, β, γ)であるとき、その面の垂直応力 σ 、せん断応力 τ を求める計算図である。

まず、円Ⅰ、円Ⅱ、円Ⅲをつぎの中心、半径で描く。 $\sigma_1 > \sigma_2 > \sigma_3$ とする。

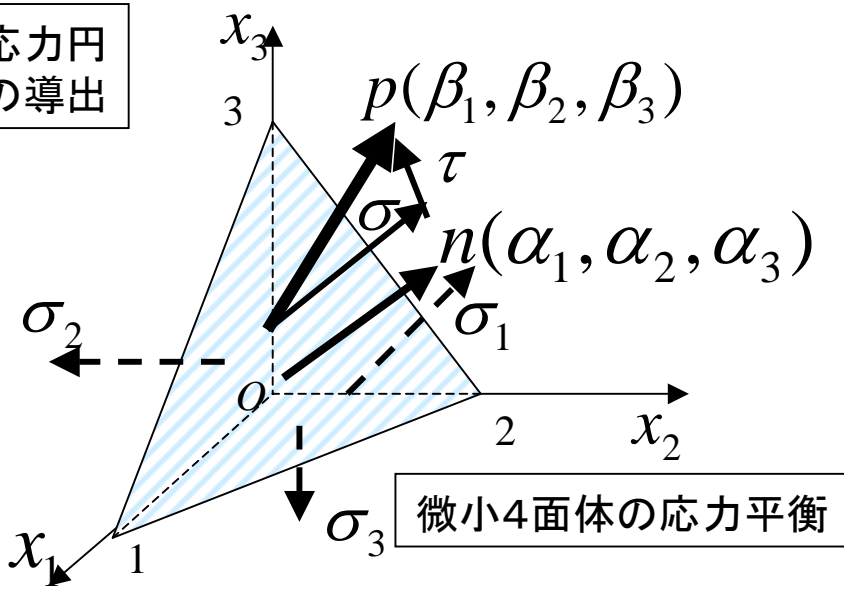
$$\text{円Ⅰ: } \left(\frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}, 0 \right), r_1 = \frac{\sigma_2 - \sigma_3}{2}$$

$$\text{円Ⅱ: } \left(\frac{\sigma_1 + \sigma_3}{2}, 0 \right), r_2 = \frac{\sigma_1 - \sigma_3}{2}$$

$$\text{円Ⅲ: } \left(\frac{\sigma_1 + \sigma_2}{2}, 0 \right), r_3 = \frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2}$$

AA'に対し α_1 をなす直線と円Ⅱとの交点 Q_1 を通る円Ⅰの同心円を描く。同様に、 α_2, α_3 から Q_2, Q_3 を求め、円Ⅱ、円Ⅲの同心円を描くと、この三つの円が1点Gで交わる。この点の座標(σ, τ)が求める応力である。

応力円の導出



微小4面体の応力平衡

直交3軸にそれぞれ $\sigma_1, \sigma_2, \sigma_3$ の応力が作用しているとき、その $\Delta 123$ 面上の合応力を p とする。 p の面に垂直な成分を σ 、面に平行な成分、すなわち、せん断応力を τ とする。

$\Delta 123$ の面積を A とすると、 p の各直交成分は、 $\Delta O23 = A \cos \alpha_1, \Delta O31 = A \cos \alpha_2, \Delta O12 = A \cos \alpha_3$ であるから、力 pA の x_1 成分は、 $pA \cos \beta_1 = \sigma_1 A \cos \alpha_1 \rightarrow p \cos \beta_1 = \sigma_1 \cos \alpha_1$ 同様にして、力 pA の x_2, x_3 成分から、 $p \cos \beta_2 = \sigma_2 \cos \alpha_2, p \cos \beta_3 = \sigma_3 \cos \alpha_3$

ここに、方向余弦の性質から、

$$\cos^2 \alpha_1 + \cos^2 \alpha_2 + \cos^2 \alpha_3 = 1$$

$$\cos^2 \beta_1 + \cos^2 \beta_2 + \cos^2 \beta_3 = 1$$

である。

$$p^2 = (p \cos \beta_1)^2 + (p \cos \beta_2)^2 + (p \cos \beta_3)^2 = \sigma_1^2 \cos^2 \alpha_1 + \sigma_2^2 \cos^2 \alpha_2 + \sigma_3^2 \cos^2 \alpha_3$$

$\sigma_i (i = 1, 2, 3)$ の \mathbf{n} (A の法線) 方向成分の合計が σ になるので、

$$\sigma = \sigma_1 \cos^2 \alpha_1 + \sigma_2 \cos^2 \alpha_2 + \sigma_3 \cos^2 \alpha_3$$

せん断応力は、

$$\tau^2 = p^2 - \sigma^2$$

$$\begin{aligned} &= \sigma_1^2 \cos^2 \alpha_1 + \sigma_2^2 \cos^2 \alpha_2 + \sigma_3^2 \cos^2 \alpha_3 \\ &\quad - (\sigma_1 \cos^2 \alpha_1 + \sigma_2 \cos^2 \alpha_2 + \sigma_3 \cos^2 \alpha_3)^2 \\ &= \sigma_1^2 \cos^2 \alpha_1 (1 - \cos^2 \alpha_1) + \sigma_2^2 \cos^2 \alpha_2 (1 - \cos^2 \alpha_2) \\ &\quad + \sigma_3^2 \cos^2 \alpha_3 (1 - \cos^2 \alpha_3) - 2(\sigma_1 \sigma_2 \cos^2 \alpha_1 \cos^2 \alpha_2 \\ &\quad + \sigma_2 \sigma_3 \cos^2 \alpha_2 \cos^2 \alpha_3 + \sigma_3 \sigma_1 \cos^2 \alpha_3 \cos^2 \alpha_1) \end{aligned}$$

$1 - \cos^2 \alpha_1 = \cos^2 \alpha_2 + \cos^2 \alpha_3$ 等を代入して整理すると、

$\tau^2 = (\sigma_1 - \sigma_2)^2 \cos^2 \alpha_1 \cos^2 \alpha_2 + (\sigma_2 - \sigma_3)^2 \cos^2 \alpha_2 \cos^2 \alpha_3 + (\sigma_1 - \sigma_3)^2 \cos^2 \alpha_1 \cos^2 \alpha_3$
 が得られる。以上をまとめると、

$$\sigma = \sigma_1 \cos^2 \alpha_1 + \sigma_2 \cos^2 \alpha_2 + \sigma_3 \cos^2 \alpha_3$$

$$\tau^2 = (\sigma_1 - \sigma_2)^2 \cos^2 \alpha_1 \cos^2 \alpha_2 + (\sigma_2 - \sigma_3)^2 \cos^2 \alpha_2 \cos^2 \alpha_3 + (\sigma_1 - \sigma_3)^2 \cos^2 \alpha_1 \cos^2 \alpha_3$$

$$p^2 = \sigma^2 + \tau^2$$

次に、次の 3 式から $\cos^2 \alpha_1$ 、 $\cos^2 \alpha_2$ 、 $\cos^2 \alpha_3$ を求めると、

$$1 = \cos^2 \alpha_1 + \cos^2 \alpha_2 + \cos^2 \alpha_3$$

$$\sigma = \sigma_1 \cos^2 \alpha_1 + \sigma_2 \cos^2 \alpha_2 + \sigma_3 \cos^2 \alpha_3$$

$$p^2 = \sigma^2 + \tau^2 = \sigma_1^2 \cos^2 \alpha_1 + \sigma_2^2 \cos^2 \alpha_2 + \sigma_3^2 \cos^2 \alpha_3$$

$$\begin{bmatrix} \cos^2 \alpha_1 \\ \cos^2 \alpha_2 \\ \cos^2 \alpha_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 \\ \sigma_1 & \sigma_2 & \sigma_3 \\ \sigma_1^2 & \sigma_2^2 & \sigma_3^2 \end{bmatrix}^{-1} \begin{bmatrix} 1 \\ \sigma \\ p^2 \end{bmatrix} = \frac{1}{\Delta} \begin{bmatrix} \sigma_2 \sigma_3 (\sigma_3 - \sigma_2) & (\sigma_2^2 - \sigma_3^2) & (\sigma_3 - \sigma_2) \\ \sigma_3 \sigma_1 (\sigma_1 - \sigma_3) & (\sigma_3^2 - \sigma_1^2) & (\sigma_1 - \sigma_3) \\ \sigma_1 \sigma_2 (\sigma_2 - \sigma_1) & (\sigma_1^2 - \sigma_2^2) & (\sigma_2 - \sigma_1) \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 1 \\ \sigma \\ p^2 \end{bmatrix}$$

$$\begin{aligned} \Delta &= \begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 \\ \sigma_1 & \sigma_2 & \sigma_3 \\ \sigma_1^2 & \sigma_2^2 & \sigma_3^2 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 1 & 0 & 0 \\ \sigma_1 & \sigma_2 - \sigma_1 & \sigma_3 - \sigma_1 \\ \sigma_1^2 & \sigma_2^2 - \sigma_1^2 & \sigma_3^2 - \sigma_1^2 \end{vmatrix} = (\sigma_2 - \sigma_1)(\sigma_3^2 - \sigma_1^2) - (\sigma_3 - \sigma_1)(\sigma_2^2 - \sigma_1^2) \\ &= -(\sigma_3 - \sigma_2)(\sigma_1 - \sigma_3)(\sigma_2 - \sigma_1) \end{aligned}$$

$$\cos^2 \alpha_1 = -\frac{\sigma_2 \sigma_3}{(\sigma_1 - \sigma_3)(\sigma_2 - \sigma_1)} + \frac{\sigma(\sigma_2 + \sigma_3)}{(\sigma_1 - \sigma_3)(\sigma_2 - \sigma_1)} - \frac{\sigma^2 + \tau^2}{(\sigma_1 - \sigma_3)(\sigma_2 - \sigma_1)}$$

$$\cos^2 \alpha_1 = \frac{\sigma^2 - \sigma(\sigma_2 + \sigma_3) + \sigma_2\sigma_3 + \tau^2}{(\sigma_1 - \sigma_3)(\sigma_1 - \sigma_2)}$$

この分子は、

$$\sigma^2 - 2\sigma \frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2} + \left(\frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}\right)^2 - \left(\frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}\right)^2 + \sigma_2\sigma_3 + \tau^2$$

$$= \left(\sigma - \frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}\right)^2 + \tau^2 - \left(\frac{\sigma_2 - \sigma_3}{2}\right)^2$$

$$\therefore \left(\sigma - \frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}\right)^2 + \tau^2 = (\sigma_1 - \sigma_3)(\sigma_1 - \sigma_2)\cos^2 \alpha_1 + \left(\frac{\sigma_2 - \sigma_3}{2}\right)^2 = R_1^2 \dots\dots \text{円 1}$$

同様にして、

$$\left(\sigma - \frac{\sigma_3 + \sigma_1}{2}\right)^2 + \tau^2 = (\sigma_2 - \sigma_1)(\sigma_2 - \sigma_3)\cos^2 \alpha_2 + \left(\frac{\sigma_1 - \sigma_3}{2}\right)^2 = R_2^2 \dots\dots \text{円 2}$$

$$\left(\sigma - \frac{\sigma_1 + \sigma_2}{2}\right)^2 + \tau^2 = (\sigma_3 - \sigma_2)(\sigma_3 - \sigma_1)\cos^2 \alpha_3 + \left(\frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2}\right)^2 = R_3^2 \dots\dots \text{円 3}$$

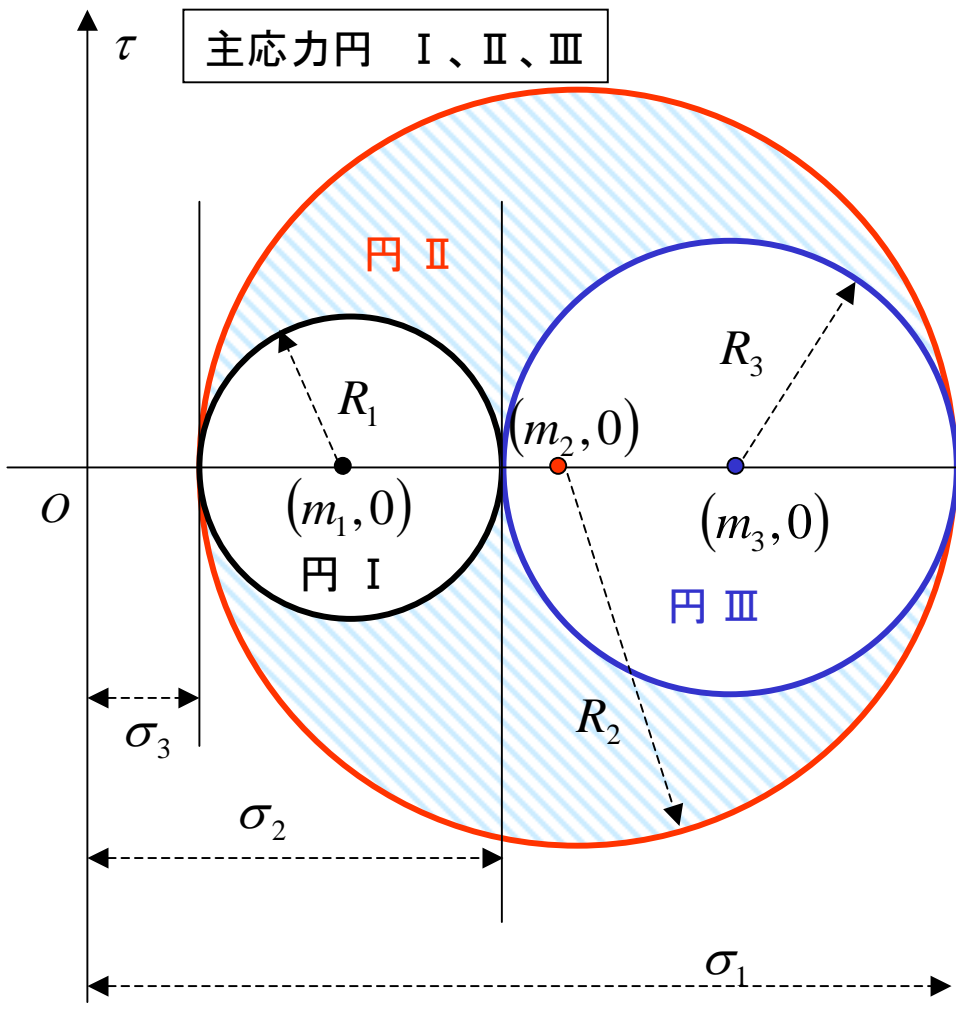
いま、 $\sigma_1 > \sigma_2 > \sigma_3$ である場合を考える。

$(\sigma_1 - \sigma_3)(\sigma_1 - \sigma_2) > 0 \rightarrow \cos^2 \alpha_1 = 0$ のとき R_1 は最小値をとる $R_1 = (\sigma_2 - \sigma_3)/2 \dots \text{円 I}$ とする。

$(\sigma_2 - \sigma_1)(\sigma_2 - \sigma_3) < 0 \rightarrow \cos^2 \alpha_2 = 0$ のとき R_2 は最大値をとる $R_2 = (\sigma_1 - \sigma_3)/2 \dots \text{円 II}$ とする。

$(\sigma_3 - \sigma_2)(\sigma_3 - \sigma_1) > 0 \rightarrow \cos^2 \alpha_3 = 0$ のとき R_3 は最小値をとる $R_3 = (\sigma_1 - \sigma_2)/2 \dots \text{円 III}$ とする。

主応力円 I、II、III



$$m_1 = \frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}, m_2 = \frac{\sigma_1 + \sigma_3}{2}, m_3 = \frac{\sigma_1 + \sigma_2}{2}$$

$$R_1 = \frac{\sigma_2 - \sigma_3}{2}, R_2 = \frac{\sigma_1 - \sigma_3}{2}, R_3 = \frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2}$$

円Iと円IIIは、可能な最小の円であるから、 $\cos^2 \alpha_1 \neq 0, \cos^2 \alpha_3 \neq 0$ のときは、 (σ, τ) の存在範囲は両円の外側となる。円IIは可能な最大の円であるから、 $\cos^2 \alpha_2 \neq 0$ のときは、 (σ, τ) の存在範囲は円IIの境界を含む内側となる。したがって、 (σ, τ) の存在範囲は、図の境界を含む斜線部内となる。

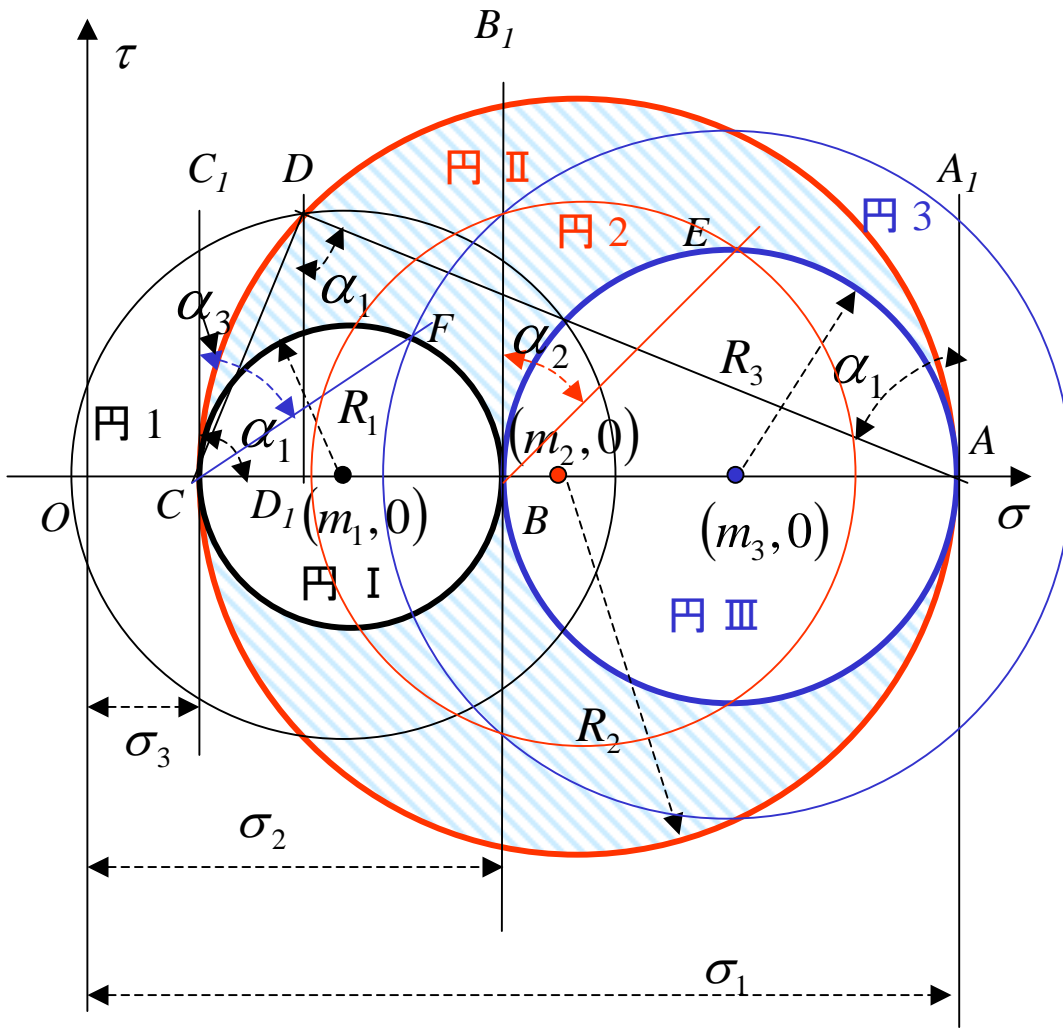
また、 $\cos^2 \alpha_1 + \cos^2 \alpha_2 + \cos^2 \alpha_3 = 1$ の制約があるから、

たとえば、 $\alpha_1 = \pi/2, \alpha_2 = \pi/4$ とすれば、 $\alpha_3 = \pi/4$ というように、3つのうち2つだけが指定可能である。

円IIでは、 $\cos^2 \alpha_2 = 0$ 、このとき、 $\tau^2 = (\sigma_3 - \sigma)(\sigma - \sigma_1)$ 、これを円Iに代入して円IIと円Iとの交点を示す式は、

$$\left(\sigma - \frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}\right)^2 + (\sigma_3 - \sigma)(\sigma - \sigma_1) = (\sigma_1 - \sigma_3)(\sigma_1 - \sigma_2)\cos^2 \alpha_1 + \left(\frac{\sigma_2 - \sigma_3}{2}\right)^2$$

これから、 $\cos^2 \alpha_1 = \frac{\sigma - \sigma_3}{\sigma_1 - \sigma_3}$ を得る。



$$m_1 = \frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}, m_2 = \frac{\sigma_1 + \sigma_3}{2}, m_3 = \frac{\sigma_1 + \sigma_2}{2}$$

$$R_1 = \frac{\sigma_2 - \sigma_3}{2}, R_2 = \frac{\sigma_1 - \sigma_3}{2}, R_3 = \frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2}$$

円 II と円 I との交点 D では $\cos^2 \alpha_1 = \frac{\sigma - \sigma_3}{\sigma_1 - \sigma_3}$

であるが、図で、

$$\cos \angle DAA_1 = \cos \angle DCD_1 = \frac{CD_1}{CD} = \frac{CD}{CA}$$

$$= \frac{\sigma - \sigma_3}{CD} = \frac{CD}{\sigma_1 - \sigma_3}$$

$$\therefore \cos^2 \angle DAA_1 = \frac{\sigma - \sigma_3}{\sigma_1 - \sigma_3} \rightarrow \alpha_1 = \angle DAA_1$$

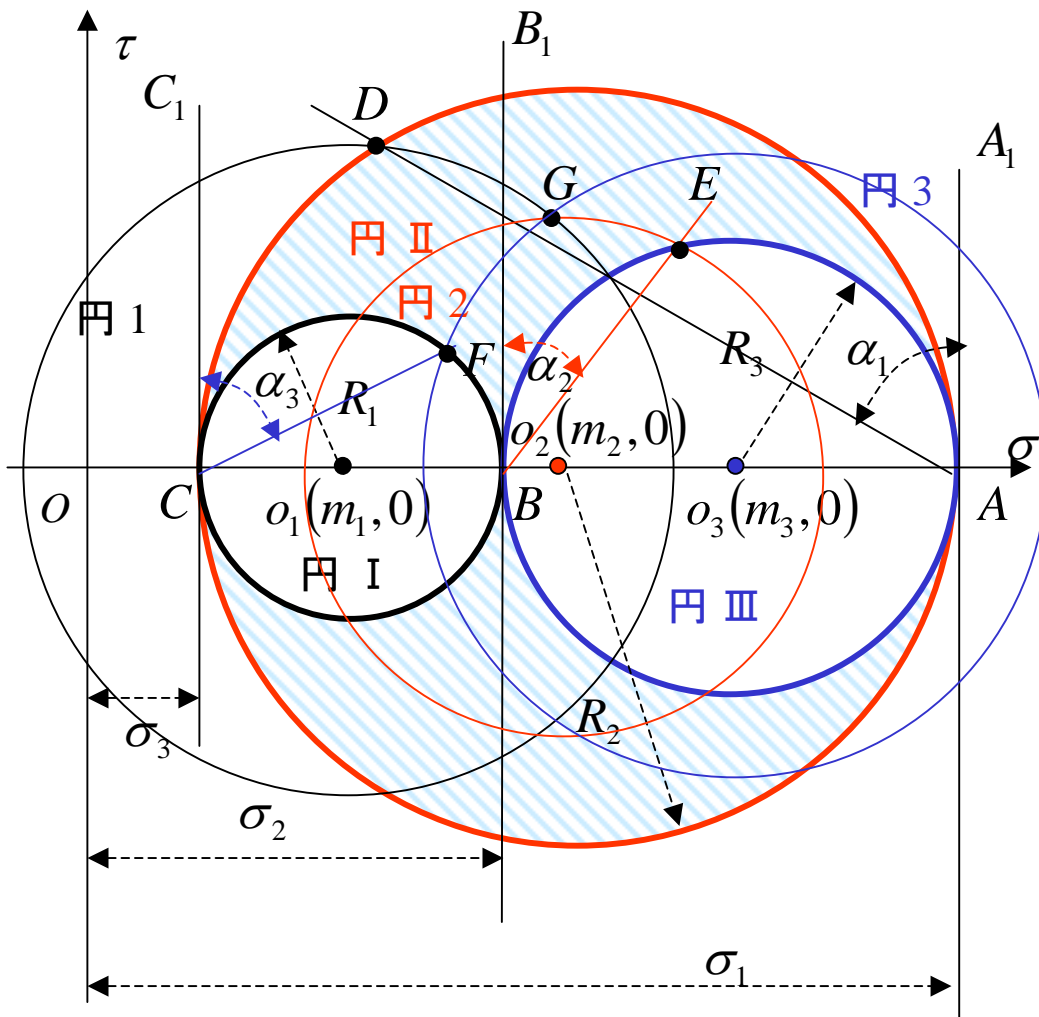
同様にして、円 III と円 II との交点から、

$$\alpha_2 = \angle EBB_1$$

円 I と円 III との交点から、

$$\alpha_3 = \angle FCC_1$$

左図では、 $\cos^2 \alpha_1 + \cos^2 \alpha_2 + \cos^2 \alpha_3 = 1$ を満たしていないので、円 I, 円 II, 円 III の 3 つの円が 1 点で交わっていないが、物体内の面を決めれば、その面の法線方向余弦から $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3$ が定まる。 $\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3$ と、 $\sigma_1, \sigma_2, \sigma_3$ が既知の場合のその面の応力 σ, τ は、次ページに示すように作図によって求められる。

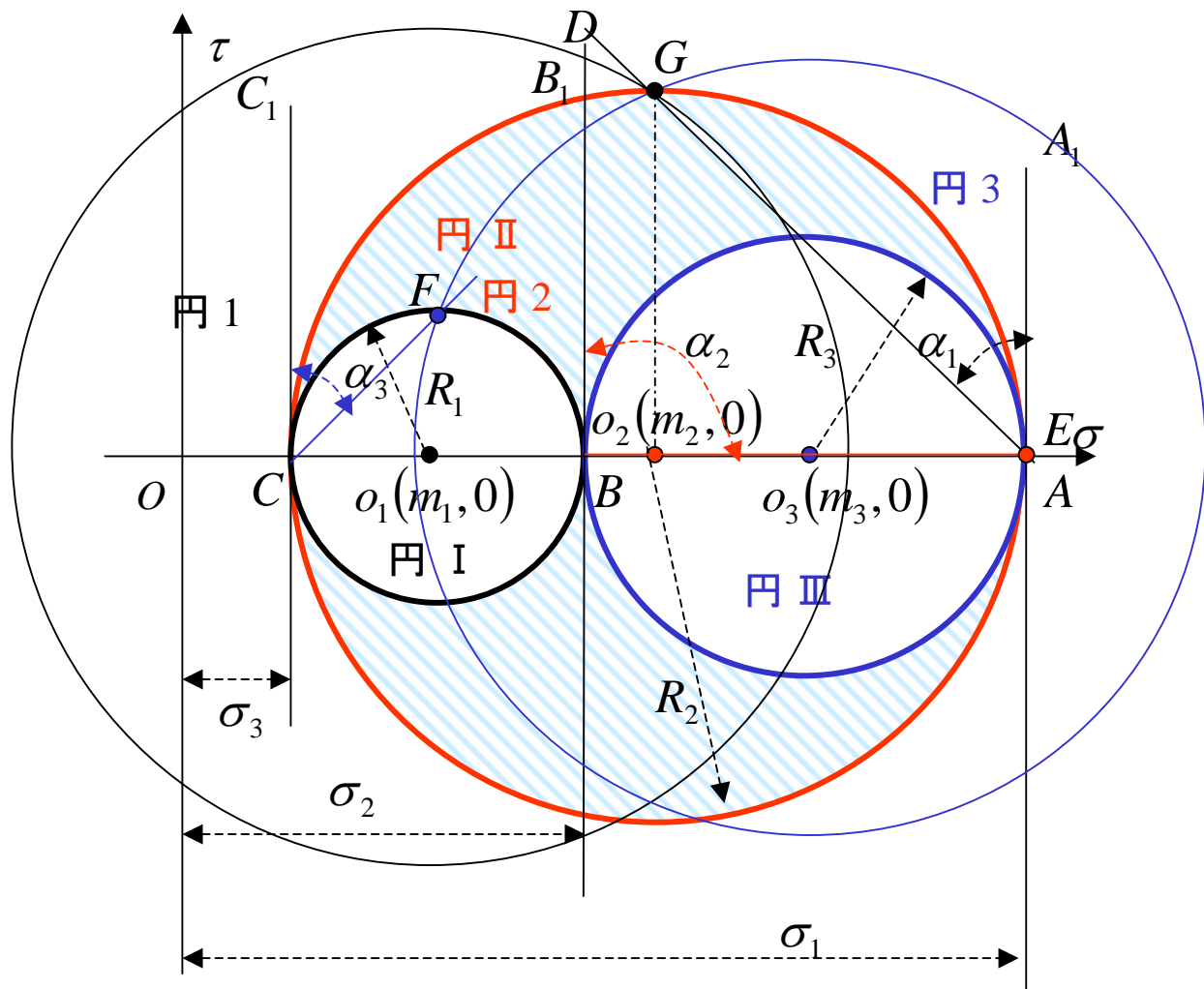


$$m_1 = \frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}, m_2 = \frac{\sigma_1 + \sigma_3}{2}, m_3 = \frac{\sigma_1 + \sigma_2}{2}$$

$$R_1 = \frac{\sigma_2 - \sigma_3}{2}, R_2 = \frac{\sigma_1 - \sigma_3}{2}, R_3 = \frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2}$$

1. $\sigma_1 > \sigma_2 > \sigma_3$ となるよう番号をつける。
2. 主応力円 I、II、III を描く。中心位置と半径は、図の下に示すとおりである。
3. $\angle A_1AD = \alpha_1$ となるよう A から円 II へ AD を引く。
4. Do_1 を半径とする円 I を描く。
5. $\angle B_1BE = \alpha_2$ となるよう B から円 III へ BE を引く。
6. Eo_2 を半径とする円 II を描く。
二つの円の交点 G が求める σ 、 τ の座標である。
7. 念のため、 CC_1 から、 α_3 をとり、円 I との交点 F を通る o_3 を中心とする円 III を描くと G を通る。

図から、最大せん断応力は、 $R_2 = \frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2}$ である(円 II の上頂点)。



最大せん断応力を与えるとき

せん断応力が最大になるのは G点である。値は円 II の半径と同じで $(\sigma_1 - \sigma_3)/2$

この点で3つの円が交わるためには、図から

$\alpha_1 = \frac{\pi}{4}, \alpha_2 = \frac{\pi}{2}, \alpha_3 = \frac{\pi}{4}$ のときであることが分かる。

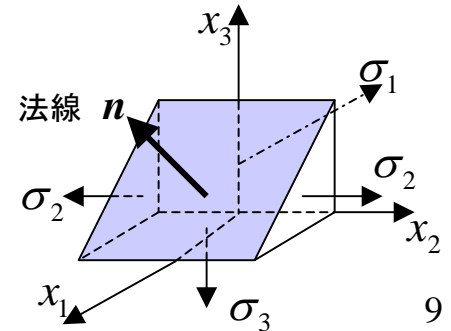
このとき、

$$\begin{aligned} & \cos^2 \alpha_1 + \cos^2 \alpha_2 + \cos^2 \alpha_3 \\ &= \cos^2 \frac{\pi}{4} + \cos^2 \frac{\pi}{2} + \cos^2 \frac{\pi}{4} \\ &= \frac{1}{2} + 0 + \frac{1}{2} = 1 \end{aligned}$$

となっている。(下図および次ページ)

$$m_1 = \frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}, m_2 = \frac{\sigma_1 + \sigma_3}{2}, m_3 = \frac{\sigma_1 + \sigma_2}{2}$$

$$R_1 = \frac{\sigma_2 - \sigma_3}{2}, R_2 = \frac{\sigma_1 - \sigma_3}{2}, R_3 = \frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2}$$



応力の平衡図と
最大せん断応力 τ_{\max}

$$\alpha_3 = \pi/4$$

$$p_3' = \sigma_3 \cos \alpha_3 = \sigma_3 / \sqrt{2}$$

$$\sigma_3' = \sigma_3 \cos^2 \alpha_3 = \sigma_3 / 2$$

$$\tau_3' = \sigma_3 \cos \alpha_3 \sin \alpha_3 = \sigma_3 / 2$$

$$\sigma_1 > \sigma_2 > \sigma_3, \text{引張りを正}$$

$$\alpha_1 = \pi/4,$$

$$\alpha_2 = \pi/2,$$

$$\alpha_3 = \pi/4$$

$$\cos \alpha_2 = 0$$

$$\rightarrow \cos^2 \alpha_1 + \cos^2 \alpha_3 = 1$$

$$\rightarrow \cos^2 \alpha_3 = 1 - \cos^2 \alpha_1 = \sin^2 \alpha_1$$

$$\therefore \alpha_3 = \pi/2 - \alpha_1$$

$$\alpha_1 = \pi/4$$

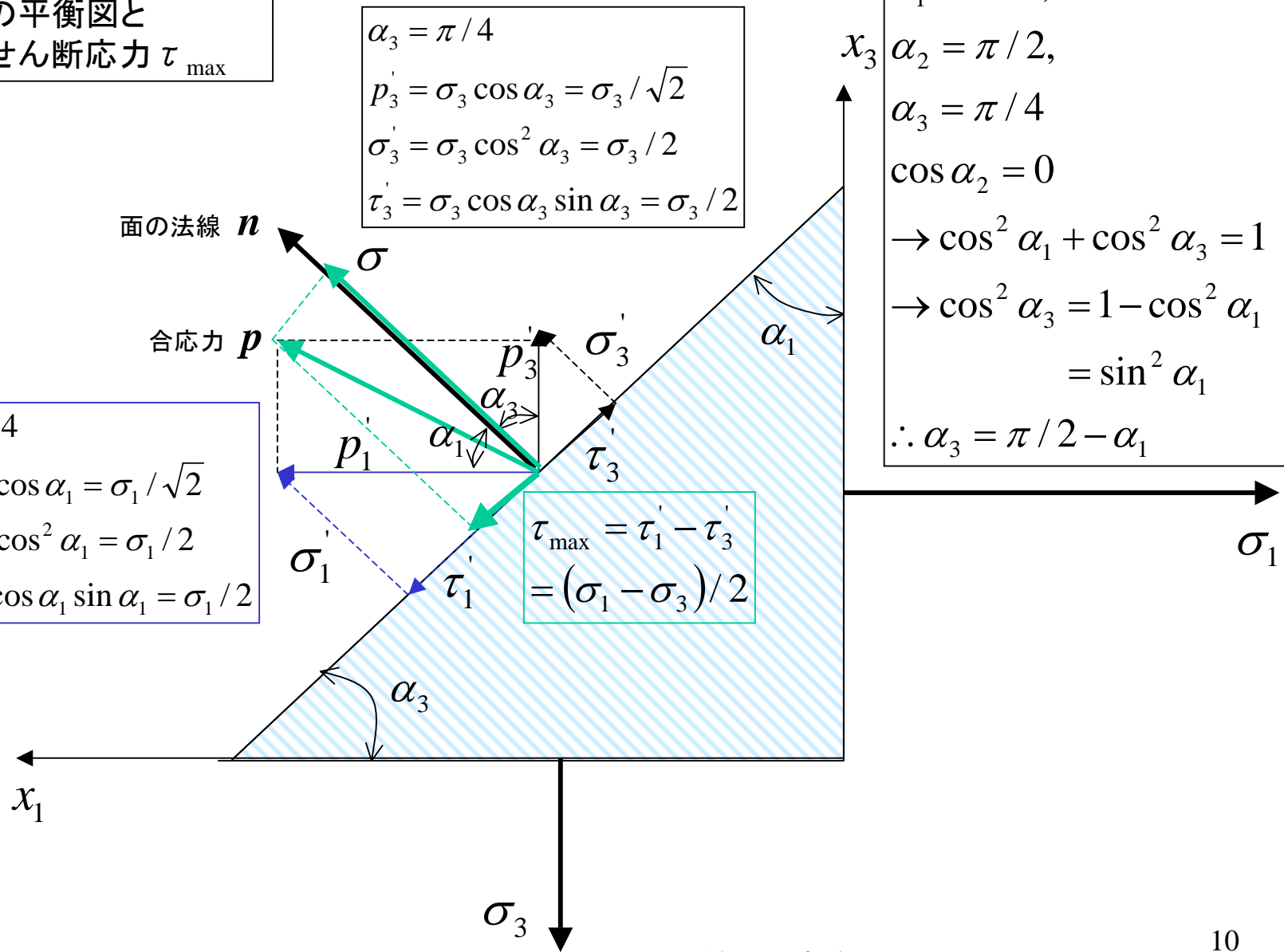
$$p_1' = \sigma_1 \cos \alpha_1 = \sigma_1 / \sqrt{2}$$

$$\sigma_1' = \sigma_1 \cos^2 \alpha_1 = \sigma_1 / 2$$

$$\tau_1' = \sigma_1 \cos \alpha_1 \sin \alpha_1 = \sigma_1 / 2$$

$$\tau_{\max} = \tau_1' - \tau_3'$$

$$= (\sigma_1 - \sigma_3) / 2$$



小さい二つの応力が等価の場合

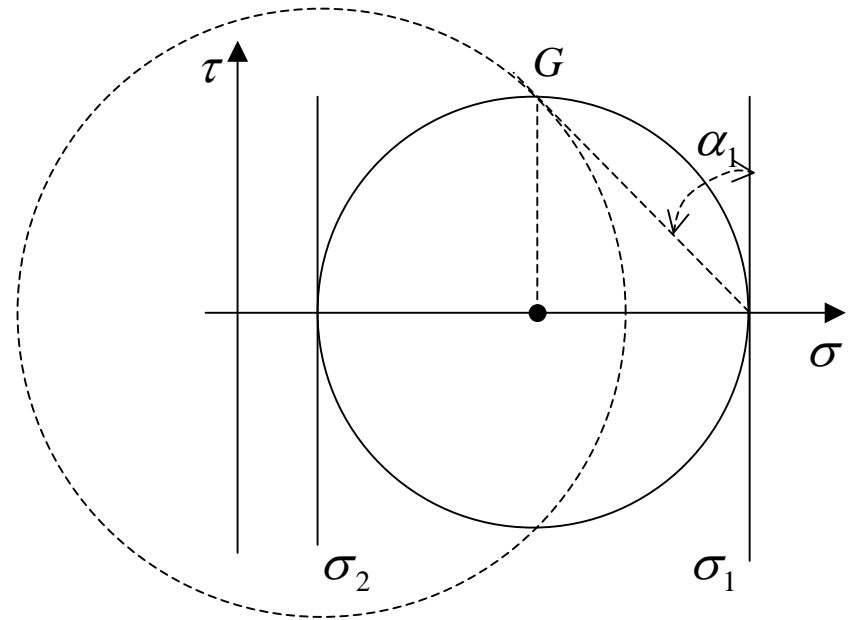
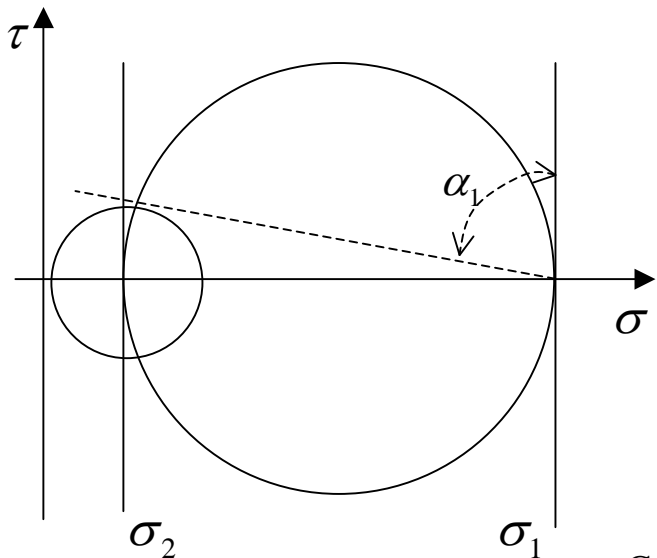
$\sigma_3 = \sigma_2$ とすると、

$$(\sigma - \sigma_2)^2 + \tau^2 = (\sigma_1 - \sigma_2)^2 \cos^2 \alpha_1$$

$$\left(\sigma - \frac{\sigma_2 + \sigma_1}{2} \right)^2 + \tau^2 = \left(\frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2} \right)^2$$

$$\left(\sigma - \frac{\sigma_1 + \sigma_2}{2} \right)^2 + \tau^2 = \left(\frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2} \right)^2$$

以上から、円Ⅰは点 $(\sigma_2, 0)$ 、円Ⅱと円Ⅲ、円2、円3が重なる。



最大せん断応力は、 $\alpha_1 = \pi/4$ のときで、値は、
 $\tau_{\max} = (\sigma_1 - \sigma_2)/2$ である。

大きい二つの応力が等価の場合

$\sigma_2 = \sigma_1$ とすると、

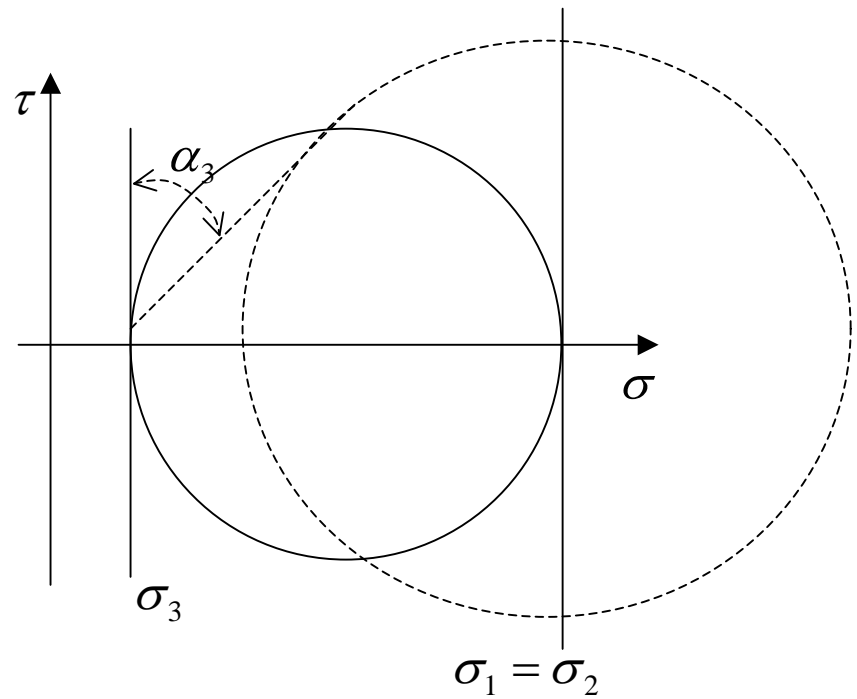
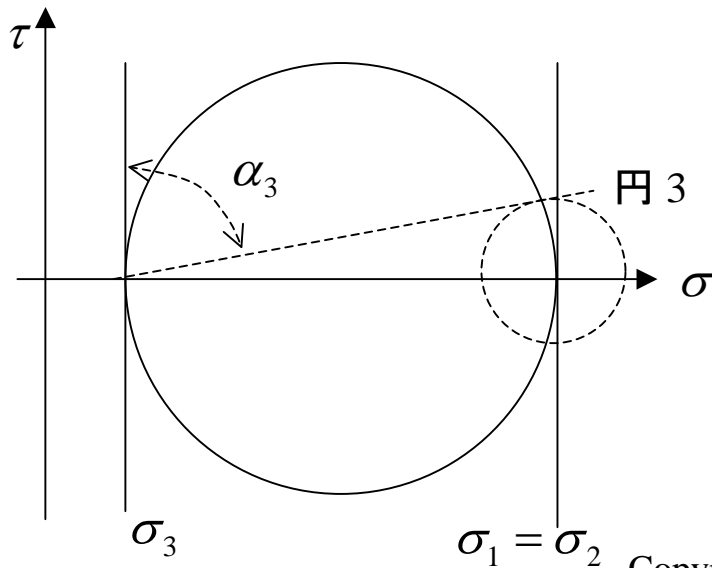
$$\left(\sigma - \frac{\sigma_1 + \sigma_3}{2}\right)^2 + \tau^2 = \left(\frac{\sigma_1 - \sigma_3}{2}\right)^2$$

$$\left(\sigma - \frac{\sigma_1 + \sigma_3}{2}\right)^2 + \tau^2 = \left(\frac{\sigma_1 - \sigma_3}{2}\right)^2$$

$$(\sigma - \sigma_1)^2 + \tau^2 = (\sigma_1 - \sigma_3)^2 \cos^2 \alpha_3$$

以上から、円 I と円 II、円 1、円 2
が重なる。円 III は点 $(\sigma_1, 0)$ 、

σ, τ の存在範囲は円 I = 円 II 上。



最大せん断応力は $\alpha_3 = \pi/4$

のときで、値は、

$$\tau_{\max} = (\sigma_1 - \sigma_3)/2 \text{ である。}$$

直交三軸の応力が等しい場合

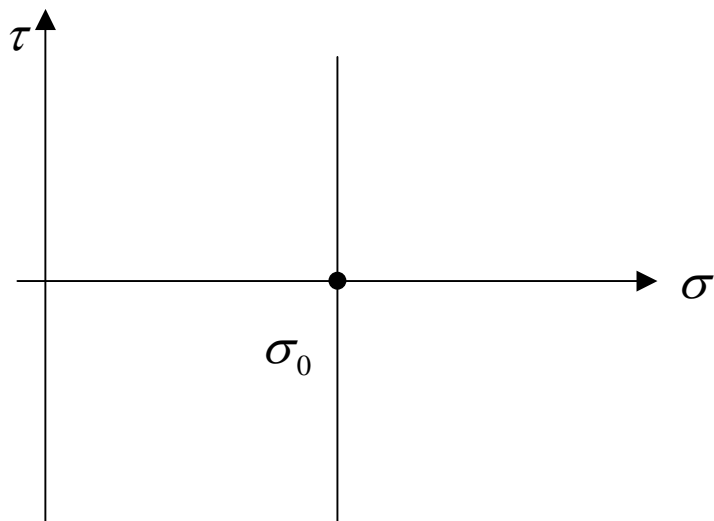
$\sigma_3 = \sigma_2 = \sigma_1 = \sigma_0$ とすると、

$$(\sigma - \sigma_0)^2 + \tau^2 = 0$$

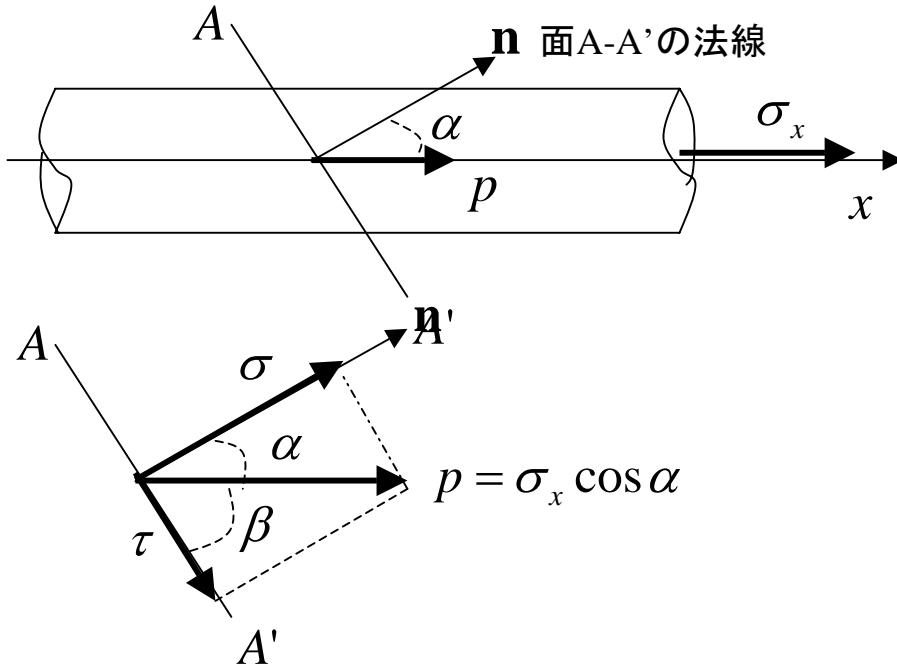
円Ⅰと円Ⅱ、円Ⅲ、円1、円2

円3が点 $(\sigma_0, 0)$ で重なる。

せん断応力は 0 である。



単純応力の場合(1軸)

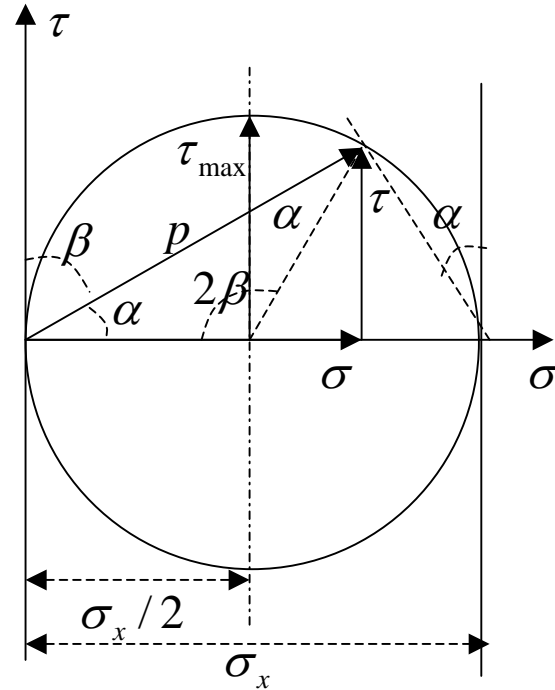


$$\sigma = p \cos \alpha = \sigma_x \cos^2 \alpha = \sigma_x (1 + \cos 2\alpha) / 2$$

$$\tau = p \sin \alpha = \sigma_x \sin \alpha \cos \alpha = \sigma_x \sin 2\alpha / 2$$

$$\therefore \left(\sigma - \frac{\sigma_x}{2} \right)^2 + \tau^2 = \left(\frac{\sigma_x}{2} \right)^2$$

これは、中心座標 $(\sigma_x/2, 0)$, 半径 $\sigma_x/2$ の円である。

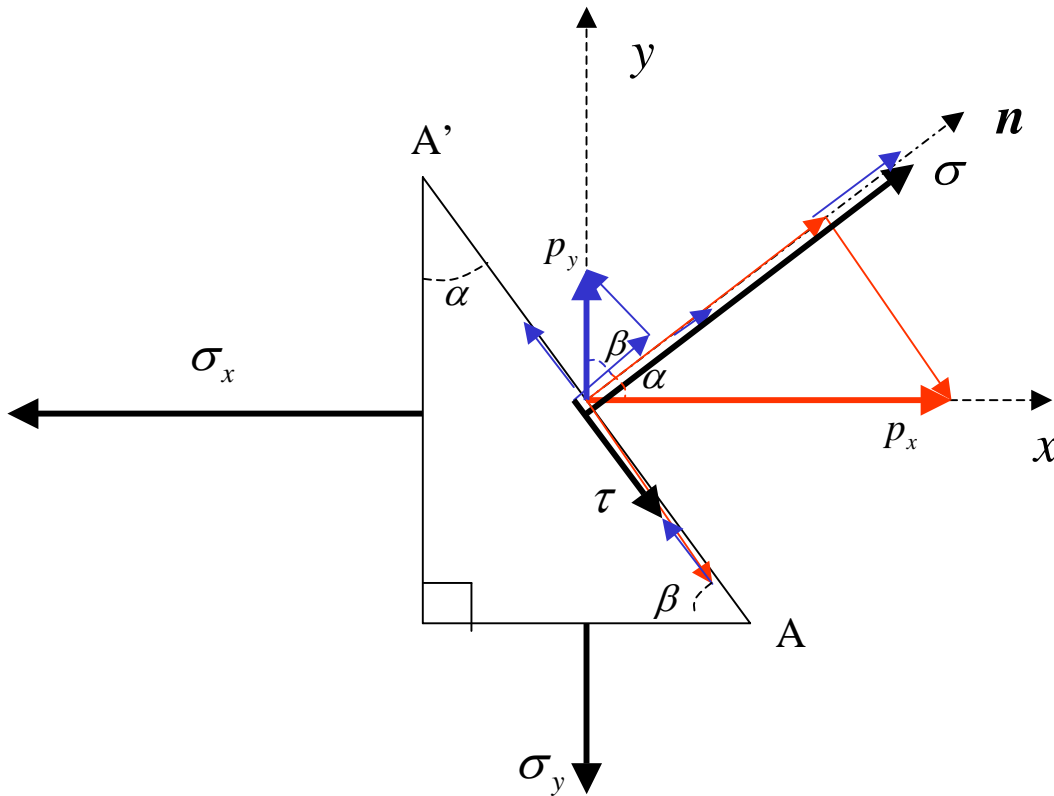


α を所定の値にとり応力円との交点をとればそこが σ , τ を与える。

α の代わりに 2β を0から時計式に増加して行く方法もある。

最大せん断応力は、 $\alpha = \beta = \pi/4$ で生じる。その値は、 $\sigma_x/2$ である。

平面応力の場合(2軸の主応力が既知の場合)



面の法線 \mathbf{n} と x 軸とのなす角を α , y 軸となす角を β とする。
 $\alpha + \beta = \pi/2$ である。

$p_x = \sigma_x \cos \alpha$, $p_y = \sigma_y \cos \beta$
 p_x, p_y の \mathbf{n} 方向成分のベクトル和が垂直応力 σ である。

p_x, p_y の x, y 軸を含む $A-A'$ 面方向成分のベクトル和がせん断応力 τ である。

式で表すと、次になる。

$$\begin{aligned} \sigma &= p_x \cos \alpha + p_y \cos \beta \\ &= \sigma_x \cos^2 \alpha + \sigma_y \cos^2 \beta \\ &= \sigma_x \cos^2 \alpha + \sigma_y \sin^2 \alpha \\ &= \sigma_x \frac{1 + \cos 2\alpha}{2} + \sigma_y \frac{1 - \cos 2\alpha}{2} \end{aligned}$$

$$\sigma = \frac{\sigma_x + \sigma_y}{2} + \frac{\sigma_x - \sigma_y}{2} \cos 2\beta \dots (A)$$

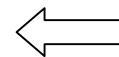
$$\begin{aligned} \tau &= p_x \sin \alpha - p_y \sin \beta \\ &= \sigma_x \sin \alpha \cos \alpha - \sigma_y \sin \beta \cos \beta \\ &= \sigma_x \sin \alpha \cos \alpha - \sigma_y \sin \beta \cos \alpha \end{aligned}$$

$$\tau = \frac{\sigma_x - \sigma_y}{2} \sin 2\alpha \dots (B)$$

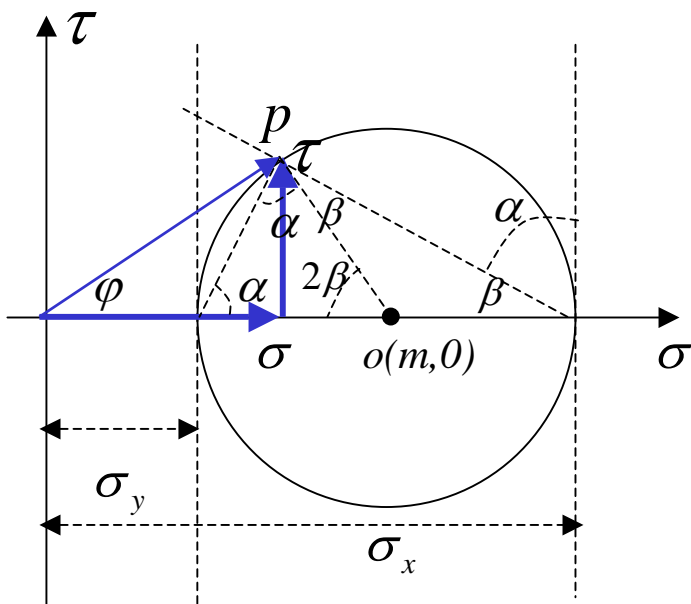
(A)(B)式から $\cos^2 \theta + \sin^2 \theta = 1$ を応用して α を消去すると、

$$\left(\sigma - \frac{\sigma_x + \sigma_y}{2} \right)^2 + \tau^2 = \left(\frac{\sigma_x - \sigma_y}{2} \right)^2$$

これは、中心座標 $\left(\frac{\sigma_x + \sigma_y}{2}, 0 \right)$, 半径 $\left| \frac{\sigma_x - \sigma_y}{2} \right|$ の円である。



二次元のモールの応力円



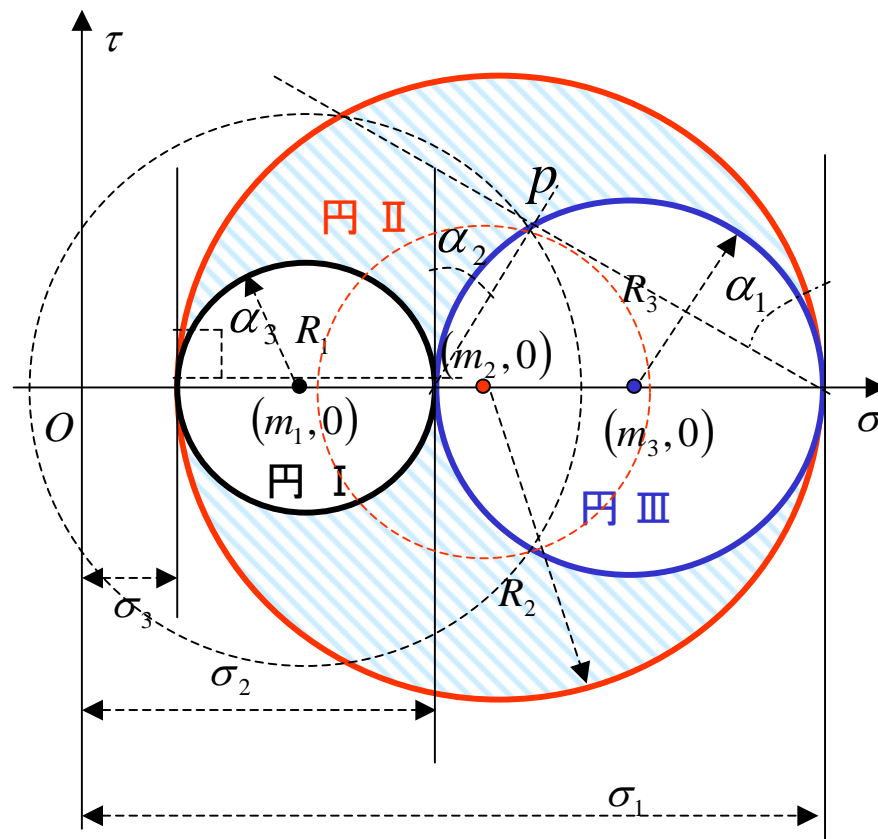
$$m = (\sigma_x + \sigma_y) / 2$$

$$r = (\sigma_x - \sigma_y) / 2$$

$$m_1 = \frac{\sigma_2 + \sigma_3}{2}, m_2 = \frac{\sigma_1 + \sigma_3}{2}, m_3 = \frac{\sigma_1 + \sigma_2}{2}$$

$$R_1 = \frac{\sigma_2 - \sigma_3}{2}, R_2 = \frac{\sigma_1 - \sigma_3}{2}, R_3 = \frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2}$$

三次元のモールの応力円との関係



上図で、以下の置き換えにより円Ⅲ (青) 上の点 p が左図と同じ点になる。

$$\sigma_1 = \sigma_x, \sigma_2 = \sigma_y, \sigma_3 = \sigma_z = 0$$

$$\alpha_1 = \alpha, \alpha_2 = \beta, \alpha_3 = \pi / 2$$

$$\sigma'_x + j\tau'_{xy} = \sigma_0 + \{(\sigma_x - \sigma_0) + j\tau_{yx}\} \varepsilon^{j2\theta}$$

$$\sigma'_x = \sigma_0 + (\sigma_x - \sigma_0) \cos 2\theta - \tau_{yx} \sin 2\theta$$

$$\tau'_{xy} = (\sigma_x - \sigma_0) \sin 2\theta + \tau_{yx} \cos 2\theta$$

$\sigma_0 = (\sigma_x + \sigma_y)/2$ を代入して、

$$\sigma'_x = \frac{(\sigma_x + \sigma_y)}{2} + \frac{(\sigma_x - \sigma_y)}{2} \cos 2\theta - \tau_{yx} \sin 2\theta$$

$$\tau'_{yx} = \frac{(\sigma_x - \sigma_y)}{2} \sin 2\theta + \tau_{yx} \cos 2\theta$$

同様に、 p_2 、 p_2' の式からは、

$$-r \varepsilon^{j2\beta} = p_2 - \sigma_0$$

$$p_2' = \sigma_0 + (p_2 - \sigma_0) \varepsilon^{j2\theta}$$

$$\sigma'_y + j\tau'_{xy} = \sigma_0 + \{(\sigma_y - \sigma_0) + j\tau_{xy}\} \varepsilon^{j2\theta}$$

$$\sigma'_y = \sigma_0 + (\sigma_y - \sigma_0) \cos 2\theta - \tau_{xy} \sin 2\theta$$

$$= \frac{(\sigma_x + \sigma_y)}{2} - \frac{(\sigma_x - \sigma_y)}{2} \cos 2\theta - \tau_{xy} \sin 2\theta$$

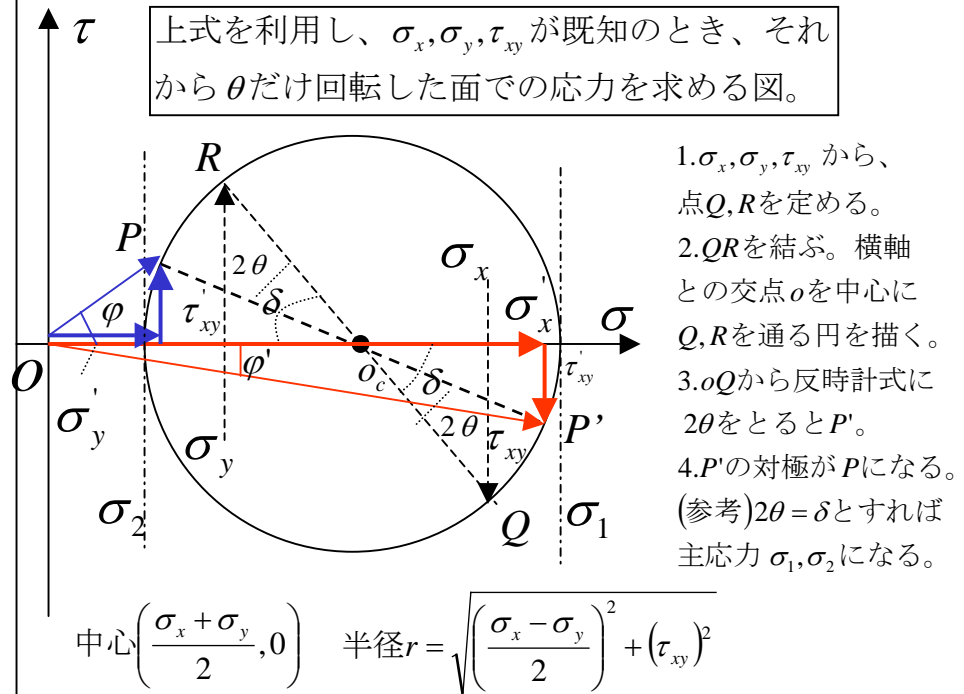
$$\tau'_{xy} = -\frac{(\sigma_x - \sigma_y)}{2} \sin 2\theta + \tau_{xy} \cos 2\theta$$

$\tau_{xy} = -\tau_{yx}$ 、 $\tau'_{xy} = -\tau'_{yx}$ なので、以上をまとめると、

$$\sigma'_x = \frac{(\sigma_x + \sigma_y)}{2} + \frac{(\sigma_x - \sigma_y)}{2} \cos 2\theta + \tau_{xy} \sin 2\theta$$

$$\sigma'_y = \frac{(\sigma_x + \sigma_y)}{2} - \frac{(\sigma_x - \sigma_y)}{2} \cos 2\theta - \tau_{xy} \sin 2\theta$$

$$\tau'_{xy} = -\frac{(\sigma_x - \sigma_y)}{2} \sin 2\theta + \tau_{xy} \cos 2\theta$$



二次元応力円の応用

最大せん断応力

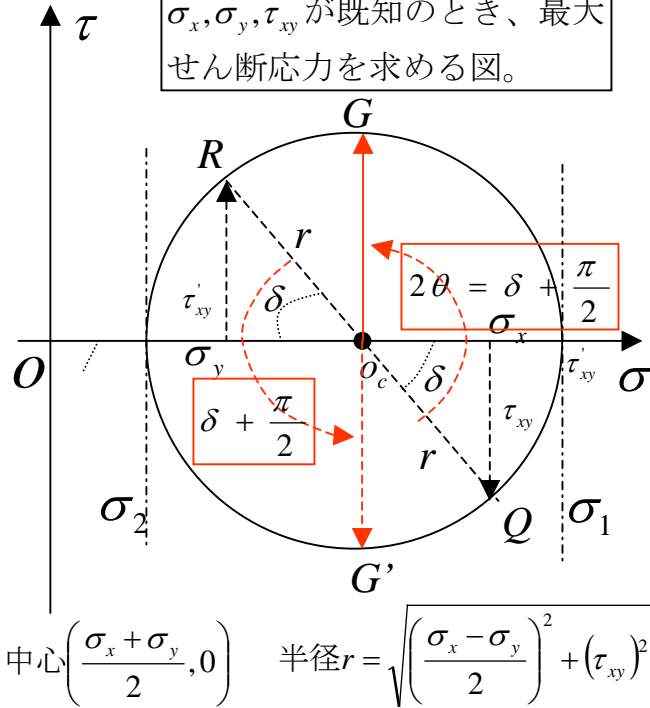
$\sigma_x, \sigma_y, \tau_{xy}$ が既知のとき、最大せん断応力を求める図。

1. $\sigma_x, \sigma_y, \tau_{xy}$ から、点 Q, R を定める。
2. QR を結ぶ。横軸との交点 o を中心に Q, R を通る円を描く。
3. 円の上、下の頂点 G, G' が絶対値が最大のせん断応力である。

$$2\theta = \delta - \frac{\pi}{2}$$

$$\therefore \theta = \frac{\delta}{2} + \frac{\pi}{4}$$

$$\tan \delta = \frac{2\tau_{xy}}{\sigma_x - \sigma_y}$$



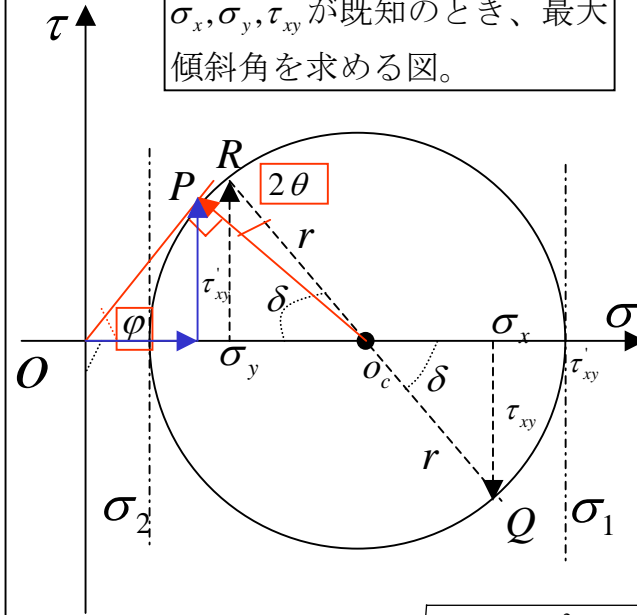
最大、最小垂直応力

$\sigma_x, \sigma_y, \tau_{xy}$ が既知のとき、最大、最小垂直応力は、図の σ_1, σ_2 で、その値は、

$$\sigma_1, \sigma_2 = Oo \pm r = \frac{\sigma_x + \sigma_y}{2} \pm \sqrt{\left(\frac{\sigma_x - \sigma_y}{2}\right)^2 + (\tau_{xy})^2}$$

最大傾斜角

$\sigma_x, \sigma_y, \tau_{xy}$ が既知のとき、最大傾斜角を求める図。



中心 $\left(\frac{\sigma_x + \sigma_y}{2}, 0\right)$ 半径 $r = \sqrt{\left(\frac{\sigma_x - \sigma_y}{2}\right)^2 + (\tau_{xy})^2} = \frac{\sigma_1 - \sigma_2}{2}$

最大傾斜角 (合応力の、面の垂線に対する角度の最大値) を ϕ とすれば、上図のように、原点 O から円に接線 OP を引けば、

$$\sin \phi = \frac{OP}{Oo} = \frac{\sqrt{(\sigma_1 - \sigma_2)^2 + (2\tau_{xy})^2} / 2}{(\sigma_x + \sigma_y) / 2}$$

$$= \frac{\sqrt{(\sigma_x - \sigma_y)^2 + (2\tau_{xy})^2}}{(\sigma_x + \sigma_y)} = \frac{\sigma_1 - \sigma_2}{\sigma_1 + \sigma_2}$$